

1月7日

## 「小羊の勝利」

黙示録 17:13-14

武安 宏樹 牧師

本年聖句から、「小羊」はキリストを、「彼ら」は地上の諸権力を指しており、「彼ら」の背後に大バビロンと刻印された女を乗せた獣が、一体化しています。しかし本書は迫害と試練は避けながら、どんな狂暴な権力や獣であっても、許容範囲内しか活動できず、小羊の印を押された者は救われると約束します。苦難のしもべとしてほふられた小羊は、やがて審判主として敵を打ち砕く為、彼らは断末魔の総攻撃を仕掛け、「打ち勝ちます」は確信に満ちた未来形です。キリストは小羊また羊飼いと登場し、私たちもまた主にあって小羊です。

一つ目に、私たちは迷うやすい小羊として羊飼いの腕の中にあることと、声に従うことが大事です。「主は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。」パウロは「キリストのうちに」「キリストにあって」(エペ 1:)表現を多用します。キリストのうちに生きる教会と信者が、戦いの力までも備えられるからです。ダビデは「あなたが私とともにおられますから」と、羊飼いと羊の関係に例え、危険&孤独&罪の「死の陰の谷」に際しても、主と共に居る確信に立ちました。

二つ目に、小羊は羊飼いの単なる所有物でなく、高価で尊い愛の対象です。旧約時代の傷のない最上のいけにえは、来るべきキリストの贖いの予型です。カインの作物、サウルの二級品、ダビデの激高から、神の要求の高さを知り、贖い主キリストに対してどれほど愛して惜しまれたか、知ることができます。主の血は全ての罪をきよめ、もはや神を喜ばせるため善行も金銀も不要です。キリスト者の罪は愛への不信です。ひねくれた心を放置してはなりません。

三つ目に小羊は弱々しく見えますが、未来形で勝利を保証されています。主イエスは御自分を偽ることなく、ピラトの宣言するが如く罪無き方でした。その小羊の背後に全能の羊飼いが、万軍の主が御使いを従えて一体化します。世は暗く戦いは予想され気は重いですが、私たちが持つべきものは希望です。世&罪&悪魔への戦いは、無限でなく期間限定で勝利を前提とした戦いです。「小羊は彼らに打ち勝ちます。」信仰&希望&愛のキリスト者でありましょう。

1月14日

### 「焼かれない御言葉」

エレミヤ 36:21-32

武安 宏樹 牧師

善王ヨシヤの子エホヤキムは治世 11 年の長さに比して、聖書的な評価は、傀儡政権からか民に重税、主の前に不正、預言者を迫害など厳しいものです。本章の特殊性は預言者を通して語られた御言葉が、どのように筆記保存され、今日の私たちに及ぶのか知り、そこに御手があることを知ることができます。

#### ①「みな、書きしるせ」

巻き物にされたのは長期的には聖書正典 66 巻のためと、言えるでしょうが、3 節には一人でも多くの者が、御言葉を聞いて悔い改めと赦しを得るためと、現代に即して言えば文書伝道を通して福音の拡大を願うのと、近いでしょう。「みな、書きしるせ」ですから、どの章も節もどれ一つ語らずにはいられない。主の熱情を覚えつつ、私たちも聖書を漫然と読まないようにしたいものです。読むことは伝えることで、神⇒読み手⇒聞き手へ文字を通して霊が働きます。されどエレミヤは監禁の身であり、高貴な身分で有能なバルクが書写します。意図的に委ねたかは不明ですが、聴衆の顕著な反応から功を奏したようです。「神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く」(ヘブ 4:12)とあり、首長たちは御言葉に刺される柔軟さがありました。けれどもそれを拒む者は、何を刺すかと言えば他人に対してや、さらに悪質な切り刻み方があるのです。

#### ②「焼かれない御言葉」

幸か不幸か巻き物は王の目にするところとなりましたが、彼らの霊性は、残念ながら岩盤のようでした。拒むだけならまだしも剣は巻き物に向かい、御言葉を刀で粉々にし焼却処分と、秦朝の焚書坑儒以上の敵意丸出しでした。何故そこまでするのかといえば、主を恐れないばかりに恐れに取りつかれて、サウルが果てしなくダビデを追いながら、悪霊に追われるのと同様でした。結局エレミヤ & バルクも巻き物も滅ぼせず、御手に抗うのは無駄な努力です。御手の中で二人は隠され、巻き物は復元されたばかりかさらに充実しました。火の中や獅子の口と聞けばダニエル書ですが、神の言葉とそれを信じる者は、瀕死の試練に遭っても不滅であり、驚くべきことに異邦の王さえ反応したと、分かります。御言葉は斬られても焼かれても、朽ちずに必ず使命を果します。私たちは今日も有難い思いで聖書を開き、感謝にあふれて黙想しましょう。

1月21日

### 「引き出されて語る者」

エレミヤ 38:1-13

武安 宏樹 牧師

ゼデキヤはヨシヤの子、エホアハズ & エホヤキムの兄弟にあたりますが、バビロン和平交渉 & 奴隷解放 & 預言者への従順など、良い面もあった一方で、最終的には捕囚転落を決定づけた不従順に堕し、一筋縄でいかない王でした。どこか自分がないというか、成り行きに身を任せる柔弱さが感じられます。エレミヤを殺せと迫る側近たちに、あなたたちの好きにせよと責任放棄する。リーダーシップ不在は、かの総督ポンテオ・ピラトと酷似します(マタ 27:24)。加えて国や民の存亡よりも、自分の醜態を晒すのを恐れる始末でした(19節)。半世紀以上前に「無責任男」が流行りましたが、やはり世の中は要領ではなく、真面目にコツコツ筋を通す生き方の方が、結局は得をするのかも知れません。

されど真面目に生きる彼方に救いがあるのではなく、救いは主の恵みです。時に脱線したくなったり不真面目な時もあるけど、主の真実ゆえに生かされる。日々の語りかけの点を線で結べば御手が見える。これが信仰者の生き方です。エレミヤがまさにそうでした。どこへ行き、何を語り、いかに救われるかも、全て主権は主にあります(1:7-8)。これを人間の努力で歩もうとするならば、敵が攻めてくる難しい状況で、ゼデキヤのように妥協を余儀なくされます。しかしエレミヤは暗い地下牢や(37:)、呼吸困難な泥の中に放り込まれても、主に示されたことを余すことなく語れば、主が責任取られると確信していた。彼は異邦人宦官に救出され、捕囚でゼデキヤ家の惨状と反対に保護されます。

だから本章には救いの主権性が予表されています。ユダヤ人も異邦人でも、高貴でも卑賤でも、誰にも救いの道は開かれている。恐れる王に最後通告で、「どうぞ、主の声、私があなたに語っていることに聞き従ってください。そうすれば、あなたはしあわせになり、あなたのいのちは助かるのです。」(20節)たしかに救いは王の願いでした。この崖っ淵で聞き従うならば救われますと、伸ばされた愛の御手を語るも「心を閉ざして、立ち返らなかった」(Ⅱ歴 36:13)その心は全面対決したエホヤキムも、御都合主義のゼデキヤも大差なかった。この「しあわせ」はモーセの言葉の引用(申 4:40)、主の民の歴史的原則でした。意気地無しと意固地は結びつきます。主は陰府の力に勝利しました(ヨハ 1:5)。心の全てを明け渡し、芯が強く打たれ強く、柔軟に従うのがキリスト者です。

1月28日

## 「自由と選択」

エレミヤ 40:1-16

武安 宏樹 牧師

前章で南王国は滅亡。王は両眼奪われ、王家は虐殺、市街は焼き討ちに。投降者と民の大部分はバビロンへ。一方で残された貧民には畑を与えるなど、侍従長ネブザルアダンは異邦人でありながら、主の律法に基づくかのような、占領地政策を行い、エレミヤの預言活動は評価して自由の身とし保護します。皮肉にも主の民が解さなかった真実を、異邦人が第三者の立場から理解して、寛容政策が律法の民に相応しいと、非王家出身のゲダルヤを総督に任じます。

エレミヤの身の振り方については、バビロン行か残留か本人に委ねた結果、恵まれない民やゲリラ勢力の残る、不安定要素の強いユダ残留を選びました。平和には為政者と民、民と民の間の信頼関係で、憎しみや不平等を取り除き、自分の頭で考え、自分の口で発言し、自分の手で働くことが必要になります。そして隣人の祝福と社会全体の平和に努めることで、奇しくも侍従長と総督と預言者が一致していました。けれども束の間の平和を良く思わない連中が、愛国者・反体制派・野心家の権力闘争や外国の思惑から、隙を窺っていました。

ゲダルヤの平和政策は功を奏し、離散民が戻り、経済効果も挙がりました。彼も不穏な動きは察していたでしょうが、「そんなことはしてはならない」と内部闘争に発展しかねない、ヨハナンのイシュマエル暗殺計画に耳を貸さず、結果的に逃げも隠れもしない清廉なゲダルヤは、殺害の憂き目に遭いました。本章～次章でエレミヤの預言は登場しませんが、わずか4年間の治世を通し、親しいゲダルヤの生き様&死に様に、一連の出来事で語らせているようです。

二人に共通していたのは、主の御心としてのバビロンの支配を受け入れて、売国奴と言われ命の危険に晒されながらも、召された道を選び取ったことで、ここに信仰の道があります。身の安全や名誉や利益は後回しかどうでもよく、人間的に見れば不利益極まりない愚かな道を選ぶ。不信者は利益を求めます。偶像礼拝者は見返りを求めます。けれども私たち信仰者は本質的に違います。それは主が無条件の愛で罪人を愛し、十字架上で死ぬ愚を選び取ったことを、知るからです。自由に喜んで御心を行う国こそ、天の御国&地上の教会です。二人の目指す国家像は時期尚早でしたが、恵みによる新約時代の前味でした。

2月4日

### 「言行不一致①」

エレミヤ 42:1-17

武安 宏樹 牧師

総督ゲダルヤを殺害したイシュマエルは国外に逃亡し、ヨハナンらが掌握。彼らは殊勝にも御心を求めますが、水面下でエジプト移住に備えていました。本来ならば残留か逃亡か示されてから動くのが筋で、心は中立ではなかった。にも拘らず引き返してエレミヤのもとに来たのは、迷いがあったのでしょうか。「良くて悪くても、聞き従います」は、結果から見れば嘘臭く聞こえますが、この時点では真剣で、「しあわせを得るため」も御利益信仰と即決できません。なぜ彼らは言行不一致に陥ったのか。不信仰と断罪する前に10日間の空白が、どのような心理的影響を及ぼして、以下の空気が醸成されたか考えましょう。

#### ①「恐れ」

エジプトに行きたい動機として、カルデヤ人の復讐への恐れがありました。ヨハナンは本意か否かともかく指導者となり、民の置かれた状況も把握して、そんな彼らにバビロンの王を恐れるな、どうして主なる神以外を恐れるのか、エジプトが安全との根拠はどこから来るか。主は恐れを問われました。モーセは能力不足や口下手を率直に吐露し、主は適切に答え彼は立ちました。0日間は誓約を誠実に履行するため、主以外の存在を恐れている自分たちが、へりくだるための時間で(詩139:)、このダビデの祈りが求められていました。心の傷はないか、人間的計画はないか、恐れはないか。祈るなら分かります。困難な状況は避けて通るのではなく、試練の意味を主に伺う絶好の機会です。

#### ②「決心」

彼らは恐れに後押しされて、10日間のうちにエジプト行を決心しました。警告が耳に入らないほど、恐れへの対策と思い込みで霊的に塞がれていました。見えるところが魅力的だから大丈夫だと過信する。聞こえる声が喧しいからみんなで渡れば怖くないと盲信する。この確信は自分に依り頼む偶像礼拝と、大勢が賛成すればOKとの多数決に潜む、指導者の無責任の現れではないか。人為的なツルの一声や単なる多数決で事が進めば、主の血潮は通いません。手をつなぎ合えば何でも可能という、バベルの塔の如き破滅が待っています。恐れを放置した10日間で頑迷となった。私たちは常に祈りと反省が必要です。御霊による祈りの刷新で、悔い改め・悪霊追放・視野拡大・知恵が備わります。

2月11日

「神の愛のご計画の中で」

ローマ 8:28-30

本馬 信義 師

①「神の愛の計画の中で、神とともに歩み、すべてを益とされる恵み」(28 節)

私たちが、神を愛することができるのは、神が私たちのことを愛し、計画をもって私たちを救い、神の国に招いて下さる故(ロマ 1:7/ I ヨハ 4:10・19/ヨハ 3:16)。神は、神を愛する私たちいつもともにおられ、すべてのことのうちにあっても働いて益としてくださる(ロマ 8:17-27,31-39/参照=創 50:20/エレ 29:10-14/使 2:22-47)。

②「神の愛の計画の内容～御子イエス・キリストを通し、神に愛される子たちとして、神の愛の交わり(神の家族)に迎えられる恵み。」(29 節)

どうして、神は、神を愛する私たちのために、すべてのことを働かせて、益として下さるのか？それは、神が、私たちをご自身の愛する御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたから。神は御子によって、私たちをご自分の愛する子たちとして神の愛の家族に迎え、永遠の御国へと私たちを招くよう計画された(マタ 3:17/ロマ 8:14-23)。そして私たちが御子イエス・キリストの、復活の栄光の姿に変えてくださる(ロマ 8:11,17,23,30/ヒリ 3:21/ I ヨハ 3:1-2/ I コリ 15:49)。

③「神の愛の計画の実現のため、神がなされる救いのみわざ」(30 節)

その神の愛の計画の中で、神は、御子を遣わし、十字架で贖いを成し遂げ、罪人である私たちのために、救いの道を開かれた。福音をもって、キリストへの信仰へと私たちを導き、御子による救いへと私たちを召して、招かれる(ロマ 1:5-7/エペ 1:11-14/ I コリ 1:9)。そして、御子の贖いにより、私たちを義と認めてくださる(ロマ 3:21-24/5:1-11)。そして、御子イエス・キリストの再臨により、私たちに栄光を与えられる(ヒリ 3:20-21/ I ヨハ 3:1-2/ I コリ 1:7-9/ I ペテ 5:10-11/ I テサ 5:23-24)。神の愛の計画が、神のなされる救いのみわざの中で実現していく。そして、私たちの味方となり、ご自身の永遠の愛の中に、すべてのことの中にあっても私たちを導き、神に愛される子たちとして御前に立たせてくださる(ロマ 8:28-39)。

2月18日

「幸せに生きる秘訣」

箴言 16:20

渡邊 賢治 師

だれもが幸せに生きたいと願います。「みことばに心を留める人は幸せを見つける。主により頼む人は幸いです。」とあります。「みことば」とは、神のことばです。これに心を留めそれに従って生きる人は幸せを見出します。皆さんが聞いたことのある三つのことばに心を留めてみましょう。

①「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。

わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタ 11:28)イエスさまの招きのことばです。今も多くの人がこのことばに救われ、癒され平安を得ています。イエスさまの招きは特別な人だけではありません。「すべて」の人にです。

②「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。」(I テサ 5:16-18)

だれもがこうありたいと願います。「喜び」は人を幸せにします。ある人の『ほほえみ』という詩に、「ほほえみはただです。神さま与えてくれた妙薬です。周りを幸せにします。」とありますが、本当にそうです。「ありがとう」(感謝)のことばは人を元気にします。

③「何とかして、幾人か救うためです。私はすべてのことを福音のためにしています。」(I コリ 9:22-23)

福音は「最も大切なこと。キリストのこと」(15:3,4)。私たちはキリストを信じ救われ、幸いな人生に入れられました。だからこそ人々に知らせたいと思います。「何とかして」～私たちにどんなことができるでしょうか。身体に障害を抱えた星野富弘さんの詩と絵画は、多くの人を励まし救いへと導いています。そのきっかけは同じ病室の中学生に(口にくわえてやっとの思いで)、『お富』(自分の名)と書いたものが大変喜ばれたことで、「こんな字でも人を励ますことができるのか。絵を描きたい！」のことです。

2月25日

## 「言行不一致②」

エレミヤ 42:18-43:7

武安 宏樹 牧師

バビロン襲撃を恐れて、エジプト行が御心かエレミヤに神意を託しますが、否定されると「あなたは偽りを語っている」と詰め寄る、言行不一致の民です。たとえばセールスで顧客に偽って契約させたり、配偶者ある者が浮気すると、人間関係&社会的信用に傷がついて訴えられますが、神と人の関係はどうか。契約の民でありながら、罪を犯しても大丈夫とか、主が敵対しているのだと、自分たちの生きたい様に生きる方が幸せと見くびる、自己中心な霊性でした。「あなたがたは『迷い出て』しまっている」この原語は「迷う」「惑う」と訳され、「迷惑」と聞けば「ある行為で他人が不利益&不快感を受ける」日本的表現です。これだと罪の客観的事実以前に、みんなが嫌がるかどうかなので迷惑な者は、民でなくエレミヤになってしまう。「迷惑」は親鸞が用いる仏教用語でもあり、自身の不足を「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して〜」(教行信証)と、ちんもつたいせん救いを得て説いても、仏の道から外れている言行不一致を心底嘆いています。この葛藤はパウロも同感で(ロマ 7:)、仏法でも律法でも求道する者の限界です。我儘な民だけでなく、釈迦も親鸞もエレミヤもパウロも等しく迷っています。

何故エレミヤは迷える民に対し、「あなたがたは迷い出ている」と語るのか。契約&律法を思い返すと、アブラハム〜モーセ〜ダビデと結ばれた契約は、人の信心&行為の優秀さの結果ではなく、主なる神から与えられた恵みです。恵みの教えを喜んで守れば祝福、そうでないとさばきという形で戒められる。実際に彼らは主から何を語られようが、柵に張り付いて背を向けてきました。羊の囲いの中で民は養われ、どんなに迷い出ても主は結んだ契約を守ります。実際は柵を越えて他の羊飼いを求めるも、「天の女王」(44:)を擬製した上で、彼らの願いはこちらに、都合悪いことはみな主のせい。まさに「迷惑」でした。これこそ人の罪の本質です。「私は、ほんとうにみじめな人間です」(ロマ 7:24)パウロは率直に告白しつつ、キリストの贖罪が「いのちの御霊の原理」(ロマ 8:)によって信じる者を罪の縄目から解放すると、救いの喜びを表現しています。肉からは悪い行いばかりですが、御霊に満たされて契約の恵みを味わいます。私たちはみな迷い出る者で、神にも人にも多大な迷惑をかける罪人の頭です。それを謙虚に認めれば、立てられた契約の内に御霊が迷いを断ち切られます。



3月4日

### 「バビロンの最期」

エレミヤ 51:59-64

武安 宏樹 牧師

本書最終回です。46章以降エジプト→ペリシテ人→モアブ→アモンと続き、最後の50～51章は諸外国への中で群を抜いた分量で、バビロンに預言します。たしかに主はバビロンとネブカデネザルを、主の民をさばく道具としました。だからと言って主は高ぶる彼らをいつまでも意のままにさせません(ダニ 4:)。王はバビロンを壮麗な城壁&門&'宮殿&大運河&つり庭園などの豪華な事業で、古代世界最高の都市にし、宗教的にも神殿再建事業で神になろうと欲します。その高塔神殿こそかつてバベルの塔として、人知と権力を結集して神に挑み、同じくネブカデネザルもこれを再建し、自ら不朽の記念碑を刻銘しましたが、驕れる者久しからずや、彼の死後僅か23年でバビロンはペルシャに滅ぼされ、結果的にクロス王の寛容政策の恩恵で、民は捕囚からの帰還を許されました。そのペルシャも200年後にギリシャ、その250年後にはローマに取って代わり、以上生々流転についてダニエルは巨大な像の夢について説き明かし(ダニ 2:)、主なる神だけが永遠であり歴史を司る全能者であることを、証しています。

地上の統治を委ねられた権力者の高ぶりに、主の御手は厳しく臨みますが、エレミヤは列王記巻末そのままの52章を付録とし、3ヶ月で捕囚の憂き目に遭ったエホヤキンが、晩年はバビロンの王に厚遇される慰めを記しています。そこには権勢を誇る者の没落という無常観よりも、悔い改め低くされた者を、引き上げて慰めてくださる来るべき永遠の王国を暗示しています(ダニ 2:44)。この国を治めるキリストは権力者やバビロンと反対に、馬小屋で産声上げた、低く貧しい御姿であり、弟子たちは人間的に取り柄のない素朴な者たちです。いやしと悪霊追放と救いに導かれたのは、社会的に無力で差別された者たち。弟子たちの出世争いを戒めたのは、人の欲でなく恵みを志向するためであり、主の帰天に代わって、聖霊を注がれたのは彼らが恵みの民となるためでした。私たちの心の内では、恵みの御霊とバベルの塔が絶えず主導権争いをします。バベルの塔は途中で切れますが、ヤコブの梯子は天から私たちに伸びており、どちらに足をかけるか日々選びます。「あるいは建て、また植えさせる」(1:10) エレミヤの召命のことばは、世の移り変わり以上に不朽の国への希望でした。私たちは聖霊により拡がる永遠の王国を望み、謙遜に生きる喜びがあります。

3月11日

「目を挙げて畑を見なさい」

ヨハネ 4:27-42

入川 達夫 師

主イエスは強い意志をもってサマリヤに赴きました。そのサマリヤ人伝道から救霊のスピリットに触れよう。

I. イエスの強い御思いによるサマリヤ人伝道—神の計画

サマリヤの女がイエスと出会い、救いにあずかり、その喜びを回りの人に語りました。そしてその結果、町全体に及んだ救いの御業。これこそが救いの本来の姿でもあります。

II. イエスの救霊への御思いと弟子たちの認識のズレ

a) イエスが携わっておられることへの弟子たちの無関心

サマリヤ人に対するイエスの行いを弟子たちは信じられませんでした。弟子たちは自分たちの事で一杯のため、イエスが関与していることに無関心になっていました。優先順位がずれてしまうと祈りさえ自己中心の祈りになってしまい、宣教の妨げになってしまいます。

b) イエスの最大関心事＝御父のみこころを行うこと

「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げること」(v.34)、すなわち十字架と復活を宣べ伝えることを最優先とすることがみこころです。

III. イエスの宣教に対する緊急意識

刈り入れるばかりになっている神の畑

刈り入れは神が語った瞬間から始まっています。斧はすでに根本に置かれています。だから私たちは、神にゆだねつつ語り続けていく必要があります。

IV. 「目を挙げて畑を見なさい」宣教、今がその時！！

a) 神が私たちを遣わされている畑を見よう！目線が下がってはいけない。

b) 御霊に満たされて畑に出て行こう！御霊に満たされると神様の望むことを知る事が出来る。

c) 収穫の喜びを兄弟姉妹と共有しよう！

3月18日

### 「私の痛みを見よ」

哀歌 1:20-22

武安 宏樹 牧師

本書はエレミヤ著者説については定かではありませんが、いずれにしても、彼のように主と民の間で苦しみつつ語り、とりなす心を持つ者だと言えます。苦悩の書として比較するとヨブ記は義人の苦しみ、本書は罪人の苦しみです。主の忌み嫌われる行いを公然と行い、預言者の捕囚の予告にも耳も貸さずに、結果として神殿も町も全て破壊され、彼らの平安と誇りも打ち砕かれました。心の拠り所の全てを失い初めて、自分が主を怒らせた刈り取りと気付きます。両書とも共通して、神から離された痛みと砕いて造り変える御手を語ります。本章の文学的技巧で、前半のユダ・シオン・ヤコブ・エルサレム等三人称から、後半は一人称「私」へ徐々に移行します。「エルサレムの痛み＝私の痛み」です。神殿から祭司も預言者も消え、財宝取り去られ、それ以上に光が失われます。それは主にある共同体の痛みであり、「私」の痛みです。諸外国から見ると、主の民は三人称で笑われる敗北者、ダビデ&ソロモン期の威光は落日を迎え、全く哀れな人々でした。「だが、すべての国々の民よ。聞け。私の痛みを見よ。

作者は「私が逆らい続けたから」に、民全体のみならず自分も重ねました。主に背を向け続けた刈り取りの実として、身も心も傷だらけで取り乱します。それは誰かがではなく、罪を犯して苦しむ主体は「私」だと、全て一人称です。彼は主に窮状を訴えているのか。それとも孤独感から慰めを願っているのか。単なる恨み節に思いがちですが、因果応報に留まらない深い世界があります。「みなの人よ。よく見よ。」「民よ、聞け。」「主よ。ご覧ください。」(12,18,20 節)それは語弊がありますがショー、全世界&主に見てほしい証しだったのです。私たちも未信者が経験しない痛みを、信仰者として受けることがあります。打たれるのが嫌なら主から離れたらよいのに、敢えてそれを受け止める者は、異邦人には驚き以外の何物でもなく、主にある高次の義と愛が垣間見えます。さばきを民が受けることを通して、異邦人にも主こそ神と知らしめんと願う。ソロモンが神殿奉献で願ったのは、諸国に主の栄光を知らしめることでした。私たちは苦しみを避けたいと願います。けれども主イエスの足跡を辿れば、罪無き方が私たち罪人の苦しみを、三人称でなく「私」の苦しみとされました。私たちも同様に生きるなら、人の苦しみを負い慰めをもたらす管となります。

3月25日

### 「主のもとに帰りたい」

哀歌 4:19-22

武安 宏樹 牧師

本書は章ごとに独立した歌ですが、5章は歌というより正確には祈りです。最後4節は祈りの中の祈り、主にすがりついて懇願する激しい祈りなのです。通常の願いと違うのは、「荒廃した状況」「明確な罪認識」「民全体」の三点です。18節まで語られてきたことは、国無く、土地無く、作物無く、インフラ無く、自由&人権無く、それ以上に礼拝が途絶え、恵みが途絶えた、「断絶」でした。恵みが途絶えたら時間が止まります。族長時代～士師時代～王朝時代を経て、恵みに満ち溢れた歴史が途絶え、将来も希望も社会形成も無意味になります。遅きに失した悔い改めに絶望の民となり、そこで目を転じて天を見上げます。地⇒天、無⇒有、絶望⇒希望。神の御性質を見上げて目が開かれていきます。天の「とこしえ」「代々」(19節)と、地の「いつまで」「長い間」(20節)が対照され、自分たちが捨てられて初めて恵みの有難さと、それ無しに生きていけないか、野良猫ならぬ「野良人間」のみじめさの自覚が、求めるに必要なステップです。

そこから必然的に「帰りたい」うめきが出てきます。エルサレムに、神殿に。「帰らせて」は使役形ですから、主が扉を開く主権を持っておられる告白です。神の主権と人の願い。どんなに願おうとも主のお赦ししなければ開きませんが、他方では扉を開かれる主が、私たち人間の願いの真剣さを試しておられます。22節は新改訳第三版は疑問形、第四版は「～でなければ」と条件文に訳します。主が私たちを完全に退け極限まで怒るならば、断絶された人間は死あるのみ。先祖から連綿と引き継がれた罪に対する怒りは、誰も受け止められませんが、「あなたを捨てず、滅ぼさず、契約を忘れない」「咎は三四代、恵みは千代」と、御言葉から反論したモーセや、アブラハムのとりなし、ダビデの悔い改め、ヒゼキヤの願いすらも聞き入れてくださったことを、思い起こすことです。19～22節は天と地を交互に行き巡り、破れ口に立つ者の悲しみと願いです。「大きな叫び声と涙とをもって祈りと願い」(ヘブ 5:7)主の十字架の叫びです。御子は一時的に父から捨てられ、退けられ、忘れられた孤独を味わいました。私たちもキリスト者として、天と地の間の破れ口に立つてとりなす祭司です。主の日は迫っています。悔い改めと共に大胆に救霊のためとりなしましょう。

4月1日

「恵みと平安がありますように」

コロサイ 1:1-2

武安 宏樹 牧師

「恵みと平安が～」の冒頭あいさつは、他のパウロ書簡も同様で読み過ぎがちですが、「おきまり」は「おきまり」で、深い意味と世界観が存在します。ペテロはじめ 12 弟子は、文字通り主の復活の証人として力強く宣教しました。当時のパウロは弟子どころか、キリスト者迫害の急先鋒として敵対しており、遅ればせながら聖霊体験で昇天後の主に出会い、回心して使徒となりました。よって在世中に薫陶を受けていない彼は、「最後に、月足らずで」(Ⅰコリ 15:8)、「劣っているとは思いません」(Ⅱコリ 11:5)等、コンプレックスも存在しました。けれども彼は大きく出たり卑屈になったりせず、自分が救われた経緯すらも、そして立ち位置やコンプレックスすらも、神の御心による選びに委ねました。

使徒の成り立ちは遅れましたが、彼は他の使徒に劣らぬ恵みを受けました。恵みとは受けるに値しない者への愛顧で、この語の 2/3 は彼の書簡に頻出し、いかに彼が恵みを受けてきたかの証左です。その最たる恵みは回心時ですが、それ以降も三回の伝道旅行での霊的戦いや、エルサレム会議などの神学論争、各書簡に横溢する魂への愛情などから、生かされている恵み、救われた恵み、奉仕を導かれる恵み、臨在と交わりの恵み、以上を受けっぱなしではなく、活かすことで恵みの循環システムが作用して、他人以上に主に仕えました。ローマ市民権や律法知識といった、彼の強みが用いられたのも勿論ですが、反対に弱さが恵みの浸透に重用されたことを、彼は力説します(Ⅱコリ 12:9)。私たちは弱さを人に見せたくない、過去の失敗の傷を消去したいものですが、祈りと黙想と聖霊の働きで、傷ついた自意識の悔い改めと解放へ導かれます。

かくて主の復活と恵みの循環を体験し、残されるのは平安です(ガラ 5:22)。「恵み⇒平安」の順序が大事です。「平安」とは安全・健康・繁栄などの意味です。復活の主は「平安があなたがたにあるように」(ヨハ 20:19)と弟子たちに言われ、恵みを理性と感情の両面で受け止めることで、平安があるよう願っています。恵みを受け、罪を悔い改め、自我が砕かれ、試練に求め、残るのは平安です。祈れば何とかなると中途半端な求め方でなく、平安が来るまで祈ることです。キリスト者はそこまで恵みと平安が浸透し、パウロのような本物となります。

4月8日

「それをここに持って来なさい」

マタイ 14:13-21

佐藤 紀子 師

「5つのパンと2匹の魚」は十字架と復活の記事を別とすれば、四福音書に記されている唯一の奇蹟で、当時の人々には大きな慰め&信仰の原点でした。

①「深くあわれんで」(14節)

「深くあわれんで」とは内臓が動かされるほど、心からの同情ということで、イエスさまは、魂と体の必要を求めてきた群衆に対して深く同情されました。群衆に注がれたあわれみは、今日も私たちに注がれています。

②「それをここに持って来なさい」(18節)

少年の持っていた5つのパンと2匹の魚が、イエスさまにささげられた時、多くの群衆の前で祝福の奇蹟が起こったのです。この大きな奇蹟のきっかけになったのは、わずかなパンと魚をささげた少年です。私たちも与えられているものをささげる時、イエスさまは大いなることを成してくださるのです。私たちのパンと魚は何でしょうか？

③「弟子たちは群衆に配った」(19節)

5つのパンと2匹の魚の奇蹟は、弟子たちの手を通して成されたのです。イエスさまの御業が行われる時、弟子たちに果たすべき役割がありました。私たちは今、神さまによって生かされています。神の御業のために私たちに与えられている役割・使命・奉仕は何でしょうか？ 私たちに役割があるなら、それはこの上もない喜びです。

4月15日

### 「天に蓄えられている希望」

コロサイ 1:3-5

武安 宏樹 牧師

原文では3～8節までひと続きの挨拶で、「感謝」(3節)のみ主動詞です。構造的には3節に4節、4節に5節がそれぞれ従属し、感謝で総括します。その感謝を「神に」ではなく、「主イエス・キリストの父なる神に」としたのは、御子が受肉して人間の姿を取られた、キリストのからだなる教会を意図して、コロサイ教会と信徒の姿のうちに、主イエスの御姿を覚えているのでしょう。

「キリスト・イエスに対する」(4節)は、「～の内に存在する(in Christ)」が直訳となり、「すべての聖徒に対して(for/to all)」とは前置詞が異なります。信仰はキリストとの個人的関係で、へその緒のように結ぶ存在的なもので、愛(アガペ)は神の愛が私たちから流れる行為的なもので、両者は並列です。他宗教は教祖や教典に「対する」信仰ですが、キリスト教は聖餐にあるように、主の肉と血にあずかる一体化ゆえ独特です。救われ主の御体に接された以上、それ以上の補足は不要です。このことを常に想起するために聖霊が重要です。「～しなければ」律法的信仰ではなく、聖霊の恵みで知識や解放が来るのです。次に「愛」ですが、ただ主と一体ならばよいとの内向き&独善的信仰ではなく、よきサマリヤ人の喩えのように、愛のために具体的行動と努力が必要です。「いっしょに2ミليون行きなさい。」(マタ 5:41)そこまでするかと思うほどに、必要を求める者に寄り添って余計に奉仕するのが、キリストの愛なのです。神秘的なキリスト信仰と、行動的な主イエスの愛が聖霊によって両立します。

以上の信仰&愛を生み出す基盤は、「天にたくわえられている望み」(5節)。信仰&愛&希望です。本書は迫害を予期したのか、将来の希望を強調します。「自分の宝は天にたくわえなさい。」(マタ 6:20)地上は自分の栄光が混入します。信仰も愛も全ては主の恵みなのに、周囲に評価されないと耐えられないのは、私たちが罪深く偽善的な証拠です。ソロモン神殿は高ぶりと共に崩れました。たえず地上に宝を積まず、天に宝を積んで満足しているか、点検しましょう。どうしたら主が喜ばれるか、信仰⇒愛⇒希望の順番で吟味するのが重要です。天に宝を積むと思わぬところで還元されます。恵みの循環に「感謝」なのです。

4月22日

### 「キリスト・イエスの中へ」

ローマ 6:3-11

沖野 毅 師

十字架と復活は、今の私たちにとってどのような意味を持つのでしょうか。バプテスマを受ける人が水の中に入るように、「キリスト・イエスにつく(原文:キリスト・イエスの中へ)バプテスマを受けた私たちは…」(3節)キリスト・イエスを信じ救われるとは、キリストの外にいた人がキリストの中になるということです。人は生まれながらにして、最初の人アダム以来の古い罪の生き方に支配されています。キリストは十字架の上で、私たちに代わって、私たちのために死なれました。そこで罪の奴隷としての生き方もともに死んだのです。

注意したいのは古い生き方と古い性質の区別です。私たちの古い生き方は十字架で死にましたが、クリスチャンも罪に陥ります。古い罪の性質は救われたのちも残るからです。ここにクリスチャンの戦いがあります。罪の奴隷ではないから、罪と戦うことができるのです。キリストの復活が示すのは、新しい生き方です。

私たちは自分自身をどのように見ているのでしょうか。みじめな罪人として見ているとしたら、神の見方と違います。たとえ罪の性質は残っていても、もう罪の奴隷ではないからです。サタンは誘惑します。〈おまえはみじめな罪人だ。罪に陥っても神は赦してくれるのだから、古い生き方のままでいいではないか〉私は何者なのかを知るのは神の声によってです。「自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい」(11節)神を礼拝することによって、みことばと祈りによって、私はキリストの中にいるのだ、古い生き方とは縁を切り、新しいいのちを生きているのだ。いつもたしかめながら、完成を目指し、前に進んでいくのです。」



4月29日

### 「理解して拡大する福音」

コロサイ 1:6～8

武安 宏樹 牧師

#### ① 理解する

本日の三点から連想するのは、福音書の種蒔きのたとえ話です(マタ 13:)。良い地に蒔かれた種は御言葉を聞いて悟る人を指し、数十倍の実を結びます。以上四つは土壌の違いで、雑草を除きよく耕された土は着実に実を結びます。原語「理解」は「知る」「上に」の合成語で、単なる知識以上に踏み込むことです。異端はいつも「自分たち＝上」と、救いや成長に知識や体験の必要を説きます。けれども本当の理解は上に向かって城を建てるのではなく、下に根を張ること。頭から心にストンと落ちる。腑に落ちる。「理解＝落ちる」やはり下向きです。そのために農夫は種蒔きに終始せず、メンテナンス作業もします(ヨハ 15:)。同じ御言葉を頂いても、主の御手に従うかどうかで理解に天地の差が出ます。

#### ② 実を結ぶ

土壌が良ければ実を結んで当然ですが、そうでなければ種か農夫か環境に、問題があると考えられます。種＝福音、農夫＝主より、環境＝家庭＆社会に、個人差があって受け入れがたい、恵まれない環境に生きていると卑下します。けれども環境にも主の幸いな御手と計画があり、実を結ぶ期待がなされます。御霊の実9種を均等に花開く人、アンバランスに実が用いられる人もいます。さらに人格の実のみならず、賜物が各人注がれ奉仕の実も期待されています。パウロはキリストのからだ論で賜物の優劣はなく、主が励まされるがゆえに、部位間が尊び合い全体が調和すると語ります。自分に注がれた賜物を喜ぶと、宣教の御業において自分の重要性を認識して、実を結ぶ業が増し加わります。

#### ③ 拡大する

この福音は根を張り芽を出し実を結んで終わる、静的な種ではありません。個人的成長に留まらず、多くの種子が再生産され爆発的に飛散するものです。異端の教えが内向きなら、福音の種は世界的＆活動的＆社会的で外向きです。宣教命令(マコ 16:15)＆聖霊降臨(使 1:8)。キリスト者自体が拡散する種子です。悪魔はこれを妨げるために③②①と遡って、福音理解を曲げようと躍起です。それほど正しい福音理解と受肉は、着実に私たちに宣教の実をも結ばせます。どのようにキリストを信じ、肢体の一部と確信し、喜ぶかがリバイバルです。

5月6日

### 「真の知識人」

コロサイ 1:9

武安 宏樹 牧師

9節以降段落が変わり、「～ますように」が三連続する祈りとなっています。「靈的な知恵＋理解力＝神の御心を知る」との単純な公式に一見なりますが、実際は「知識」「知恵」「理解」といった語が、分かるようで具体的に分かり難い。新入社員が研修で得た知識を、営業の現場でいかに運用するかが知恵であり、そこで成功や失敗をして経験を重ねると知識が増し、といった繰り返しです。されど一生懸命努力して知識と知恵が増せば、果して立派な人になれるのか。信仰者といえども人間の側での努力は、些かも軽んじられてはなりません、私たちの特権は人間の側だけではない、別の視点が存在することにあります。

創世記にヤコブという人がいますが、兄から長子の特権と祝福を奪うため、損得勘定や親との交渉や偽りなどを駆使して、せしめることに成功しました。けれども自己中心的な求めの代償は、兄&伯父の敵意や追われる恐れでした。求めたものが得られたようで得られず、人を騙して信用を失って孤独に陥り、最終的に御使いと闘って障害を得て、神の杖無しに生きられないと悟ります。もう一人、知恵の王として箴言と伝道者の書を記した、ソロモンがいます。シェバの女王の難問に答え、全世界の王が彼から知恵を求めて行列をなして、もしも彼が完璧な知識&知恵で逸脱しなかったなら、神格化されたでしょう。残念ながら彼は、主に禁じられた外国人の側室と異教礼拝を導入することで、客観的には息子の代に王国分裂、主観的には神との交わりの断絶を生みます。

私たちは神ご自身と御業の全てを知ったようで、全知全能の神から見れば、ほんの一部分に過ぎません。時間と共に知識も知恵も洞察も成長はしますが、主から離れたら全て崩壊します。御手によらなければ丁度良く用いられない。主を恐れなければどんな世&神の知恵を得ても、高慢の落とし穴が待つのです。「真の知識」は、他の箇所では「真理」「罪の意識」「キリストを真に知る」と訳され、パウロが多用する「キリストのうちに」臨在の遠近感を常に意識して生きて、初めて主に目が開かれることが分かります。それは単なる関係に留まらず、三位一体の神の協力性から、「神&私&他者」を包括的に捉えることによって、靈的なバランス感覚を常に謙虚かつ新たな視点で、保つことが出来るのです。

5月13日

## 「だれも働くことのできない夜が来る」

ヨハネ 9:1-7

入川 達夫 師

イエスが生まれつきの盲人をいやされた記事から、私たちの救霊の働きのあり方について学び取ろう。

### I. イエスの救霊の視点と弟子たちの意識

- 1) 生まれつきの盲人の苦しみ
- 2) 人の苦しみを神学的な議論の対象としか見ていない弟子たち
- 3) イエスが見られる人の苦しみの意味

### II. イエスの救霊の業

- 1) ご自身が神から遣わされたメシヤであることを現されるイエス
- 2) 神の栄光を現されたイエスのいやしの御業
- 3) イエスの救いに預かった生まれつきの盲人

### III. イエスの救霊の緊急性

- 1) 御父から遣わされた者として御業に携わっておられるイエス。
- 2) 時が縮まっている中で残された時間を余すことなく救霊の業に注がれたイエス
- 3) 宣教の働きの許される時は主の再臨の時まで

IV. だれも働くことの出来ない夜が来る前に私たちは知らないうちに救霊の視点と意識がずれてきてはいないだろうか。

- 1) イエス・キリストだけが唯一無比の救い主であることを再確認しよう
- 2) 私たちクリスチャンは神により世に遣わされた者であることを認識しよう
- 3) 終末意識をしっかりと持って救霊の業に励もう

私たちの周りの人々に対する救霊の業を最優先事項にして自分のクリスチャン生涯をおさげしようではないか。

5月20日

### 「キリスト者として歩む」

コロサイ 1:10

武安 宏樹 牧師

本節と9節後半は同じ「知識」でも対照されています。聖書を正しく学び、教理体系を理解し、それらを個人的にだけでなく相互に共有し合うことは、キリストの肢体なる私たち主の学徒として、言うまでもなく大事なことです。けれども知識の向上イコール成長と錯覚すると、つまずきの原因となります。10節は「主にかなった(=ふさわしい)歩み」、すなわち行いの必要を訴えます。そもそも主イエスの十字架こそ、愛する友のために命を捨てる至高の業です。逆に言えば知的成長は前段階です。その善行を検証すべき三点があります。

一つ目に、主に喜ばれているか、主を喜ばせるためになされているかです。「自分の道はみな正しいと思う。主は人の心の値うちをはかられる」(箴 21:2)自分を喜ばせるでも他人を喜ばせるでもなく、聖霊が心の底の純粋さを探り、確信を与えられることです。イエスさまならどう行動するか考えることです。加えて主は人知を超えた奇蹟を行われるので、価値観の皮袋を刷新しながら、何か新しい別の方策がないか期待すると、常に主に喜ばれる行いとなります。

二つ目に、その善行が実を結んでいるかです。6節は御霊の実の意ですが、本節は具体的行いの方です。もちろん両者が不可分なことは論を俟ちません。数字や目に見える実で判断しがちですが、それらは分析の材料に過ぎません。実が現れて人間関係が向上し責任ある奉仕を委ねられると、成長と錯覚して、そうでない人を笑う。これでは実を結んでも自己満足で終わってしまいます。成長を分析すると、背後の祈りや奉仕ゆえの油注ぎなど、諸要素が存在して、自分の狭さを恥じて他人の恵みに注意深くなり、恵みの潜在性に気づきます。

三つ目に、以上二点を通して神を知る知識が加わり、厚みを増すことです。座学だけでなく手の業足の業に現れる聖霊の働きを通して、実が結ばれます。御言葉を通して奉仕するのが基本ですが、奉仕を通して御言葉を知る恵みも。ヨブが一喝されたように、私たちは知識で神の摂理を暗くしてはなりません。頭も心も行いも捧げると、神が分かり自分が分かり、実と賜物が分かります。

5月27日

「強くされて感謝」

コロサイ 1:11-12

武安 宏樹 牧師

①「力×力×力」(11節)。

「権能(支配)」「強くされて」も「力」の意から、本節は「力の三乗」と言えます。神の栄光の力＝あらゆる力＝聖霊の力(使 1:8)。知識や行いだけでなく全てを統合して私たちを包み込みます。パウロは律法と行いのメカニズムに精通し、復活の主との邂逅でパリサイ人時代の教育が活かされる、円環的成長でした。逆に言えば上からの力で統合されないと、知識も行いもバラバラになります。どこまで学び、どこまで行うかは、聖霊による秩序と調和の中で導かれます。無限の神の力を有限の人の器に満たすには、あるだけ器を用意することです。三位一体の神は踊りながら私たちを囲み、聖霊は内奥から愛の声を上げます。

②「喜んで耐え忍ぶ」(11節)

「喜びをもって」を別訳に従って、「忍耐と寛容」の前に修飾語と採るならば、試練に際して苦しみ以上の意味を見出す、積極的な生き方だと理解できます。これはパウロの無理強いや、全体のため個別の苦しみに目を閉ざすのではなく、「あらゆる力」を受けながら、何で自分だけという孤独&不条理&不安を委ね、かえってこれを幸いだと思うことです(マタ 5:11-12/ I ペテ 4:12-14/ ヨハ 1:2-4)。試練は御霊と歩んで忍耐を働かせる機会。それが分かると態度が変わります。肉の思いは絶えずつぶやこうとします。面倒臭いと逃げ、他人を攻撃すると、再試が待っています。不器用に山あり谷あり人生を喜ぼうではありませんか。

③「感謝をささげる」(12節)

以上の喜んで耐え忍ぶことから、必然的に主に感謝を捧げるに至ります。この感謝は継続的な意味で、一回限り大声で感謝して完了ではありません。あれも感謝これも感謝、あの憎たらしい人もこの優柔不断な人も感謝です。注意すべきは感謝ばかり先取りして、じっくり探られて祈りと確信を深めず、口先だけでは嘘臭く軽い感謝で、周囲の証しどころか底の浅さを露呈します。感謝できない時は苦々しい思いを吐露すれば、主がカウンセリングくださり、その深い交わりゆえに感謝に変わり、遡って忍耐を喜び主の助けを知ります。苦難⇒祈り⇒力⇒喜び⇒感謝の流れを、救いの確信を基に経験することです。

6月3日

### 「御子のご支配の中に」

コロサイ 1:13-14

武安 宏樹 牧師

前節までの祈りの土台を確認しつつ、「御子のご支配」の中身を説明します。旧約時代に敵から救い、昼は雲&夜は火の柱として民を導かれた真実な主は、新約時代に罪の支配を切り裂いて、御子による救いの御国を完成されました。かくて私たちは父なる神により、御子の支配圏へと遷されました(文語訳)。この移動について、バークレイ博士は以下4つの解放が伴うと述べています。①闇⇒光、②奴隷⇒自由、③罪の宣告⇒罪の赦し、④悪魔の支配⇒神の支配。

されど今日の世界は上記と真っ向から対立し、全て逆回転するかの様です。法治体制を破壊して為政者の扱いやすい奴隷へ、急ピッチで造り替えようとしています。その背後には偽りの神々を拝ませて、人間の獣化を志向します。私たちはキリスト者として、霊的解放の喜びを謳歌しているのは感謝ですが、束縛を愛するひねくれ者の悪魔から見れば、違和感と憎悪を覚える人種です。光と闇の対照を思いつつ、御子の支配下に立つ自体が悪魔への攻撃なのです。

苛酷な世の中に生きるキリスト者は、各人が救いの確信を持つべきですが、この手紙は個々人以上に、「コロサイの聖徒たち」すなわち共同体が宛先です。御父&御子は太古から誰よりも親密でしたが、2000年前に別居となりました。されど「わたしと父とは一つ」(ヨハ 10:30)。聖霊により全く御父と合一しつつ、人の姿の長子として些かも乖離せず、悪魔の執拗な誘惑も最期まで拒まれた。死で贖いは完成し復活で死の力を打破し、悪魔の支配はジリ貧となりました。

だから悪魔が決死の覚悟で攻めるとも、贖われ救われ解放された者として、私たちは主が血を流し悪魔に勝利し築いた、神の家族&イエス一家の一員で、天上の見えない教会名簿に名が記され、地上の見える教会の愛の交わりにて、四方に聖霊のバリア張られ天井だけ直通の管のある家に、住んでいるのです。敵は建物や肉体を取り去ることは可能ですが、見えない教会は拡散します。厳しい時代に主の肢体なる教会が真価を現します。ここは贖われた民の群れ、光の御国の植民地。誰も引き離せない家族の一員として今日も生きるのです。

6月10日

## 「自由に食べなさい」

創世記 2:15 - 25

マット・ニューカーク 師

幼時から運転を待望した16歳の私に、父は小さな日産車を買って与えてくれた。これは私の得た報酬ではなく恵みであり、そしていくつかのルールが課された。以上は神による人の創造および救いに際して、関係性に適用できる原則である。

### ① 創造に際して神の恵みはルールに先行する（15～17節）

まずエデンの園＝神殿、人＝臨在の中で仕える聖職者として恵みを与えつつ、次いで神は人に「自由に食べてよい」と仰った。私たちは禁止事項を直感するが、そもそもは「与えた木から全て食べてよい」という、恵みに満ちた命令であった。受けるに価せぬ私たちが、神から日常の衣食住にどれほど恵みを受けているか、想起することで感謝と謙虚さに導かれ、いっそう神のルールに従う契機となる。その一方で1章における創造の秩序から神＝王であり、禁止事項への疑問さえ、「食べたら死ぬ」ルールを発した王の範疇にある。死には肉体と霊の二つがあり、違反は肉体の死をもたらし、さらに神を礼拝し従うべき霊性も毀損してしまい、最初の人（アダム）の墮落がもたらした霊的な死は、私たちを含めた全人類に及んでいる。これが原罪であり、人は死の支配ゆえ自力で霊的再生が不可能となった（3章）。

### ② 救いに際して神の恵みはルールに先行する（18～25節）

創造の秩序が完成した直後に、「助け手」である女性の形成と結婚関係とが、語られている。つまり墮落より前であることは、結婚について重要な意味を包含している。新約聖書で使徒パウロは夫婦をキリストと教会の関係性へと、この箇所を引用しつつ昇華させている（エペ 5:31-32）。すなわち結婚制度には、キリストが教会に賜った霊的再生が暗示されている。信者＝キリストの肢体、主が十字架上で贖罪を完遂されたことで、彼らは死のさばきから免れている。したがって本章の夫婦関係の記述は、墮落以前に救いの計画の存在を明示し、救いに際しても神の恵みが先行する。良い行いをしたから救われたのではなく、「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われた」（エペ 2:8-9）のである。私たちは魅力や功績ではなく、ただキリストにある恵みによって救われた。かくて私たちは解放された心で、恵みにより赦しの喜びに生きるのである。



6月17日

## 「神のかたち」

コロサイ 1:15

武安 宏樹 牧師

15-20節は詩形式で、17-18節を重心に前半は創造で後半は救いの並行法で、新約キリスト論の最重要箇所として、三位一体論&人間論も跨がっています。パウロは創世記を意識しつつ、かつてパリサイ人として神を追い求めた末に、聖霊体験から御子と出会い、「神のかたち=キリスト」信仰へ邁進したのです。

### ① 存在としての神のかたち

最初の人アダムは創造主が性質を模し、知情意&宗教性を持つ存在に造り、自由意志をもって喜んで従いつつ、創造主の栄光を現わすべき存在でしたが、結果的に不従順から墮落、以降の人類子々孫々神のかたちが毀損されました。その回復は信仰によらなければならず旧約期に始まるも、顕著になったのは、キリスト誕生後です。「われわれ」(創 1:26)は三位一体の表象と言われますが、パウロは父&御子&聖霊に包囲されるように、キリストとの邂逅を得ました。彼の理解する三位一体は動的です。キリストを傷つけて自分を傷つけていた、その悔い改めから聖化=回復が始まり、本来の神のかたちが現われてきます。

### ② 交わりにおける神のかたち

前項は神人のタテでしたが、私たちは人相互のヨコの交わりにも生きます。パウロは夫婦/親子/主従関係全てに、主の介在の必要を訴えます(エペ 5-6)。平和とは言えない関係の間に、砕かれた心に聖霊が働かれ、いやしが波及し、信頼関係が構築されます。そのように家族に教会に神のかたちが現われます。自分からへりくだって腹を割って語り合って、交わりの主導権を握りながら、まずやれることをやって後は委ねて祈る。十字架上の主イエスがそうでした。バルトは、1)隣人を仲間として見る、2)互いに語り聞く、3)互いに助け合う、4)これらを喜んで行う。以上四点がイエスの人格の研究から学べるとします。

### ③ 働きにおける神のかたち

人の創造の直後に統治支配権(創 1:28)が来ることから、その行使によって、神のかたちが現わされる見方がありますが、①→②→③の流れが合理的です。注目すべきは以上六日目の御業の先に、七日目の安息日(礼拝)があることで、存在→交わり→働きで一旦退いて、振り返り神のかたちを確認することです。「すべて疲れた人、重荷を負っている人は…」(マタ 11:28)休む主体は私も時間も造られた主の下に来ることです。様々な側面から神のかたちを捉えましょう。



6月24日

## 「サマリヤの女」

ヨハネ 4:1～18

布施 恒夫 師

①(3節)「主はユダヤを去って、またガリラヤへ～しかし、サマリヤを通って行かなければならなかった。」

1) なぜサマリヤを通って行かなければ？

2)(5～6節)「それで主は、スカルというサマリヤの町に～そこにはヤコブの井戸があった」

② サマリヤの女と出会う

1)「ひとりのサマリヤの女が水をくみに～イエスは『わたしに水を飲ませてください』と言われた。」

→当時、水くみは女の仕事。昼の12時は暑い時で、朝早くか夕方にする。

2) イエスが声をかける。サマリヤの女は『あなたはユダヤ人なのに、どうして』と聞く。

→ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである、との説明。

その理由は？

3)イエスは『あなたのほうでその人に求めたことでしょう。』と言う。→初めはイエスが女に声をかけ、次には「あなたのほうで求めるだろう」と逆になる。

③ 主イエスのことば

1)(13節)「イエスは『この水を飲む者はだれでも、また渇きます。』(14節)

『わたしが与える水は～泉となり～永遠のいのちへの水がわき出ます。』

2)(15節)「女はイエスに『先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。』」

3)(16節)「イエスは彼女に『行ってあなたの夫をここに呼んで来なさい。』(17節)「女は答えて『私には夫はありません』」最も知られたくないこと。「あなたには夫が5人いましたが」と主は女の素性を知り給う。主の前に、取り繕う必要なし。ありのままで、渇くことのないいのちの水を！

7月1日

## 「すべてはキリストに」

コロサイ 1:16

武安 宏樹 牧師

リンカーンは「人民の、人民による、人民のための政治」と演説しましたが、天に在るものが地に在るものの、見えないものが見えるものの背後に介在し、創造～統治～完成に至る全てがキリストのために、霊的原理は動いています。

### ①「御子にあって～創造主キリスト」

御子は天地創造の御業に父と参画し、全ての被造物(メイドインキリスト)より先に存在しました。よって全ての製品に「キリスト製」のラベルが貼られ、「キリストの権威と御心を知らずに使用すると壊れます。」と書いてあります。被造物はキリストの所有です。私たちは自身がそうであると公言すべきです。同時に神は信者にも不信者にも一般恩恵により、産物を恵んでくださいます。だから福音を語る時には罪の悔い改め以前に、人の起源たる創造の恵みから、次に墮落によって毒素が回り、やがて主イエスの再臨で世界がベールを脱ぐ、そのような大きな視点で私たちは信仰に立って、福音を伝えるのが大事です。

### ②「御子によって～統治主キリスト」

本節前半の「造られ」は過去形で、被造物に不足がないことを表わしますが、今も御手を動かす神は、墮落した世界で人も自然も滅びないように保持します。「御子を通して」(直訳)、「王座も主権も支配も権威も」天⇒地へ動かされます。この視点は私たちを目に見えるものから、見えないものを思う霊的な洞察へ、深めてくれます。それは世を離れて天を求める二元的な視点ではありません。霊的な洞察とは見えるものを見つつ、背後の動きを見極める二重の視点です。世の動きを罪深いとか悪魔的とか言うのは簡単ですが、キリスト者と教会は、神に何を求められているのでしょうか。主イエスは破れ口に立たれる御方です。

### ③「御子のために～完成主キリスト」

本節後半の「造られ」は完了形で、過去～現在に至る継続的意味があります。「～ために」＝目的。御手は終末の完成に至るまで地上へ絶えず動かされます。それは個人的にはキリスト者の栄化、主の似姿に至る完成をも意味します。「凡てのこと相働きて益となる」(コリ8:28)着々と半ば強引に(?)被造物完成へ、神は力強く引き寄せます。人生の目的は永遠に神を喜び栄光を現わすことと、有名な教理問答にありますが、あなたは何のために生きているかと問われて、明確にキリストのため生きていますと答える。なんと幸いな人生でしょうか。

7月8日

## 「教会の主キリスト」

コロサイ 1:17-18a

武安 宏樹 牧師

地上における「万物」「王座・主権・支配・権威」、キリスト盈満の新世界たる「教会」が対照されながら、聖霊の働きは創造の初めから地下水の如く流れて、時至りて終わりの時代、キリスト顕現と教会誕生の恵みを明らかにしました。組織神学的には聖霊&教会&終末がセットで、教会の存在自体が終末的です。

一つ目に、キリストと教会（＝呼び集められた群れ）との関係は不可分です。愛宕山教会で入信して今に至る人もいれば、他教会から転入会した人もいます。単に岡崎市内という理由なら、他にも正統的な教会もあるので選択肢は多い。私が青年時代に過ごした教会は家から遠く、様々な問題があったり起こしたり、「何故この教会に？」と逡巡しました。成長したり閉鎖される教会もあります。経緯は多々ありますが、それでも私たちは此処に呼び集められた者なのです。キリストが君臨される信仰ゆえ、私たちは属する教会を最高と思えるのです。

二つ目に、愛宕山教会がキリストのからだを構成しているのと同じように、教団他教会や市内教会やキャンプ支援教会なども、その肢体の一部なのです。組織や神学が違って、異端は別として「一線引くのではなく学ぶことです。」「成り立って」＝「支えられて」（新共同訳）。原語は「共に立つ」という意味です。自分の教会以外の働きに関わるには、役員会はじめ信徒方の支えが必要です。何の「得」にもならないようで、与える者の幸いから教会に「徳」が加わります。また一般社会に対する「地の塩」的働きも、教会が世に発信する力となります。

三つ目に、バイブルキャンプデーということで次世代育成に努めることで、一つの教会では人数&経済的に厳しくても、諸教会から若者が集まることで、ムーブメントに発展します。日本同盟基督教団は70年近く前から松原湖 BC、旧東海ブロックでは浜名湖 BC を開拓、集まる若者から文化が生まれました。寝食共にしながら御言葉を聴き、悩みを分かち合い、主にある友人ができて、新しい家庭が形成される。コストはかかるうも捧げて余りある祝福があります。当宣教区では西に三重開拓、東に HBC、双方は択一ではなく補完関係です。教会もキャンプもキリストのからだの力強い形成、交わりの喜びがあります。

7月15日

## 「和解の主キリスト」

コロサイ 1:18b-20

武安 宏樹 牧師

四半世紀前に世間を震撼させた、オウム真理教教祖&幹部の死刑執行から、何を求めて破壊的行為に走り、何故キリストの真理に導かれなかったのかと、そして神の選びといえども、彼らと私たちと本質的に何か違っていたのかと、逡巡しつつ、キリストの性質と業績を知ることでは私たちは生かされています。

### ① 存在も復活も最初の方（18b節）

「初め」は「支配」(16節)や「根源」(黙 3:14)とも訳され、単なる順番ではなく、創造主と被造世界の間の一線が引かれ、それは旧約では至聖所の境界でした。第一の方が永遠である以上、第二でも第三でも第百でも他は変わりません。世の中は企業トップの座のように、時の流れで順次入れ替わるものですが、社会で疎外されてきた人は、ひたすらトップの座だけを欲しがります。宗教界では非常識な内部抗争や霊的儀式で、権力欲の背後に悪霊が働きます。ライバルに勝利しなければ満たされないならば、何と空しい人生でしょうか。序列でなく主が与えた賜物を用いて、オンリー1の生き方に平安があります。

### ② 満ち満ちた方（19節）

一番になりたい、認められたい生き方の根本には、自分の立場への不満があります。競争自体は悪いことでなく、選ばれて使われて能力を発揮します。他方で敗北感に苛まれる人もいます。神は御子に栄光を惜しむことなく注ぎ、私たちの主が満足の神であることは重要です。往々にして新興宗教の教祖は、激しい不満から名声や霊能力を欲し、信者はますます欲望と空虚感へ縛られ、愛の欠如は周囲へ求めとなります。それは何と無謀で無駄な努力でしょうか。主が満ち満ちた方と知り、恵みを受けて、満足を知らない人に仕えましょう。

### ③ 平和と和解をもたらす方（20節）

市内出身の幹部は若かりし頃に轢死体の鮮血に、何を思ったのでしょうか。世の不条理に対し答を求め、血で血を洗うハルマゲドンを急いだのでしょうか。パウロもかつて神の義と称する己の義のため、ステパノ殺害に賛同しました。その血が無駄にならなかったのは、キリストのうちに、キリストによって、キリストの栄光のために流されたからです。十字架の血は天の栄光と地上の暗黒とを橋渡しして、神&他人&自分に対して和解するための解答なのです。キリストが罪意識やコンプレックスから解放し、諸霊の流れを制御されます。こんな私のために主が血を流された。その下に進み行き平安と満足を得ます。

7月22日

## 「御前に立たせるために」

コロサイ 1:21-23

武安 宏樹 牧師

### ① 悔い改めの大切さ（21節）

世の罪と異なり、聖書の罪は神を離れて敵対する神&人の関係が基本です。だから創造主を知らずに罪人と自覚できず、キリストの救いに与るためには、人間的に努力しても救われない挫折が必要です。逆に挫折を経ないことには、「為せば成る」的な信仰で周囲を傷つけます。悔い改めは頭の理解に留まらず、大声で涙を流すだけでなく、聖霊 vs 自我の格闘から深い取り扱いを要します。サウルは口先だけで預言者の好意を得て、その場をやり過ごそうとしました。ここに罪人の本質があります。パウロが異端的な二元論に対し断固戦うのは、自我を温存したまま霊知を求める、古い自分の焼き直しに終始するからです。私たちは向き合う悔い改めを避けて、知識や体験に逃げていないでしょうか。

### ② 福音からブレない（23節）

「堅く立って、はずれることなく、ふみとどまらなければ～」随分と堅苦しい信仰生活を勧めているようで、自説&新説でなく「古くて新しい聖書的福音」。無限の神のことばを有限の人間が解釈するのだから、どんなにがんばっても、御旨の全てを知り尽くすことはできないが、聖霊の光により御言葉が活きて、豊かで新しい適用が導かれ、あるいは心苦しみ悩む時に慰めを見出すのです。これは立派な聖霊体験で、古の福音から現在進行形で教えがフィットします。ブレないことで、我が身に今日も似姿が現され、聖霊に支配されることです。一つの目的のために試行錯誤しつつ、謙虚に御声と人の声に耳を傾けるうち、座学だけではない信仰の引き出しが増し、聖霊が私を制御してくださいます。

### ③ 全身で御前に立つ（22節）

「御前に立つ」＝「捧げる」意。キリスト者として地上の証しも大事ですが、十字架の血が天と地上世界の和解であるように、この架け橋を通る私たちも、主の歩まれた同様の歩みが求められます。「聖く、傷なく、非難されず」罪人が そんないけにえになれる訳ありませんが、可能にしたのが十字架の奇跡です。福音の中心は十字架の死と復活で、私たちも心&肉体セットで捧げることで、さらに御前に近づけるのです。『父よ。わが霊を御手に…』（ルカ 23:46）が、霊だけと言う人はいません。霊的生命は我が身を通して死と生命が現れると、パウロは力説します（Ⅱコリ 4:10）。福音に生きるとは知識や体験に逃げずに、手足で知性で心遣いで、正面から神と人に対して霊肉一元に生きることです。

7月29日

## 「満ち溢れる主の恵み」

ルツ記 4:1-22

原 敏夫 師

### ①「もったいなくて捨てられません」

ボアズはルツと結婚を約束します。それはルツとナオミにとっては自分の家系が途絶えな  
い、というメリットがありました。しかし、ボアズには何のメリットもありません。なぜ  
なら二人の間に産まれた子どもはボアズの家系ではなく、ルツの死んだ夫の家系を継ぐか  
らです。つまりボアズは単にルツとナオミという二人の未亡人を養うだけ、ということだ  
す。ではなぜボアズは結婚を決意したのか。それは、ルツが姑の面倒を見た以上に若い男  
の後を追わなかったしっかりした女性だったから(3:9-11)。そこにボアズは惚れたのです。  
だからどんな犠牲も惜しくないのです。愛の深さは、犠牲の深さで分かります。私たちの  
神様は私たちの救いのためにイエス様を犠牲にされました。これで私たちへの愛の深さは  
明らかです。ボアズの比ではありません。それなのに私たちは自分を卑下したり、「神様  
はこんな私を見捨てるかも…」と疑います。それは明らかに誤りです。神様はイエス様を  
犠牲にして私たちを買い戻されました。もったいなくて捨てられません。

### ②「ボアズは聖書に従いたかったのです」

ボアズは単にルツに魅力を感じたから結婚しようとしたのではありま せん。ルツの魅力が  
結婚の動機なら第一優先の者はすんなり放棄しなかったはずですが。ボアズは「死んだルツ  
の夫の家系を絶えさせてはならない」(4:10/ レビ 25:25)を大切に考えていたからです。彼は  
ルツを愛するとか、犠牲が大き いか、メリットがないとか、自分の都合ではなく、御言  
葉に従いたかったのです。

### ③「神様はしいられた者を用いられる」

12 節からタマル、ユダ、ペレツからボアズ、ダビデと系図たげを記されています。 彼らは目  
を覆う苦勞をし、当時はための苦勞か分からなかったかもしれ ない。しかし 3000 年を経  
た今、彼らの生きた意味が明らか何のにされる。私たち も今、何のための苦勞かと思っ  
ているかもしれない。しかし、神様は明確な 計画をお持ちだ。なぜなら、私たちは大きな犠  
牲をもって買い取られたから。



10月7日

### 「キリストのからだとして」

コロサイ 2:16-23

武安 宏樹 牧師

本書の「キリストのからだ論」は、他のパウロ書簡が教会論の強調と異なり、内容は変わりませんが、キリスト論から個人的靈的健全性に焦点を当てます。「こういうわけですから」(16節)は、2章前半でキリストと共に死に復活した、私たちは割礼有無や律法遵守に固執して、自分の行いで救いを得ようとする人々とは根本的に異なって、「恵みに生きる」人種とされたことを意味します。とはいえ神は靈なる方、私たちは聖化途上、世は罪と惑わしに満ちるゆえに、よほど恵みを意識しないと、キリスト者として生きるのは容易ではありません。教会の原意は「呼び集められた群れ」だから、私たちは弱くとも選ばれた者で、残るべくして残り、聖靈の恵みにより生かされていると感謝してよいのです。「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖靈による喜び」(マ 14:17)とパウロは結論づけます。「清く正しく」問答無用の律法&禁欲主義的価値観は、自分を高ぶらせ他人を裁くだけですから、もしあるなら悔い改めるべきです。恵みを第一とするならば、「飲む飲まない」生活習慣は二の次で大丈夫ですし、何が御心か自分で考え御言葉に聴くと、柔軟で快い靈的サイクルが出来ます。

さらに律法&禁欲主義は偽りの謙遜(自己卑下)と、偶像礼拝に進ませます。つまり自分の内なる律法の達成度で、段階的に他人と自分を比べて評価する、屈折した自己愛で、独自の靈的感覚でキリスト以外のものを偶像礼拝します。偶像礼拝と悪霊は結託して自分の栄光を輝かせる力となり、人格が歪みます。真の謙遜は創造主の愛と救いの選びと聖靈の恵みを、正面から受け止めます。恵みによって行うのを、逆に行いによって恵まれようとするのは本末転倒で、彼らは復活の主を十字架につけ、自分の債務証書で主を痛めつける罪を犯し、それだけでなく周囲をも引きずり込む大罪を、厚顔にも犯しているのです。彼らの致命的欠陥は「かしら(=キリスト)に堅く結び」(19節)つかないことで脳に血が巡らないと人体は機能しません。かしらは主導権争いしていないか。手と足は有機的に連動しているか。目立たぬ関節&筋は柔軟にされているか。他書に比べてパウロは最も目立たない部位の、「つなぎの重要」を強調します。手足の強化以前にストレッチ運動で、聖靈の恵みは流れて体全体が動きます。「神がその体を成長させるように、成長させる」(19節直訳)ダイナミズムです。

10月14日

## 「上を向いて歩こう」

コロサイ 3:1-4

武安 宏樹 牧師

### ① 上にあるものを求めつつ念う（1～2節）

パウロはキリスト者に世捨て人になるようにとは、全く命じてはいません。信者と未信者の相違は事実ですが、自分から一線を引いては評価されません。私たちは罪の赦しと救いの確信が、社会の中で証しをする原動力になります。以上欠けていた筆者は社会生活の苦しみから、自らの欠乏と天の祝福を認め、祈り求める中で、大事なものは何かする前に主と共にあることだと知りました。「求める」＝「よく知ろうとして一生懸命求める」＝現在時制「求め続ける」意。私たちは復活のいのちを得ましたが、得尽していないので、追求し続けます。「思う」は、「心に留める」(共同訳)、「心を定める」(英 NIV)、「念う」(文語訳)。動的に御霊を求め、静的に御言葉に沈潜する。この両面で天に近づきます。カルヴァンは「昇天は復活に続くように、信者は天に昇らなければならない」と語ります。地から遠い天へ叫ぶのではなく、間もなく携挙される至福を覚え、あたかも天の御座の前にひれ伏すようにして、親しく心開いて交わることで、形だけの信仰生活や世の桎梏から解放され、本当の意味で証しが成されます。

### ② 再臨で私たちの全てが明らかに（3～4節）

1～2節で天を見上げ親しく交わる大切さ、3～4節は理由が語られます。十字架上で主と共に私たちの古い命が「死んで」、儀式や行為で愛顧を求める卑しい思いと、世の評価や金銭や人間関係など諸々の心配事から解放されて、もちろん無関係とはいきませんが、以上に囚われる必要が無くなりました。寡婦は金も身寄りも保障もなく、この恵みを熟知していました(マコ 12:41-44)。他にも主イエスが評価したのは、徴税人や娼婦や身&心障害者など社会的に疎外された人々で、彼らはそれだけ魂の救い&永遠のいのちを求めました。「隠されて」は過去～現在までの意で、私たちは主と共に葬られてからずっと、自分の生命は天の倉庫に在し、代わりにキリストの御霊に生かされています。日常のトラブルさえ主を見上げ祈る契機です。地上で行う業の理由と全貌は、時が来れば分かることもそうでないこともあります。主のみ全知全能の方で、再臨の暁に労苦も賜物も全て知ります。「涙がこぼれないように」ではなく、「涙をぬぐい取られ」悲しみも苦しみもない御国で潤されるのです(黙 21:4)。



10月21日

### 「神の口から出ることば」

マタイ 4:4

中村 孝 師

イエス様は悪魔の「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」ということばに対して、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る1つ1つのことばによる。」と応えられました。ここでのパンは人間が必要としている霊的なパンのことを指しています。

このイエス様のことばは申命記 8 章 3 節から引用されたものです。イスラエルの民が荒野でさまよって、食べるものがないとつぶやいた時、神はマナを降らせました。また、のどが渴いたとつぶやけば、岩から水を湧き出す様にされました。これらのことはたまたま起きたことではなく、神の配慮によるものでした。このように神は荒野においていくつかの奇跡を行われたわけですが、その中で最も大きな奇跡こそが神のことばが与えられたことでした。すなわち律法が与えられました。この律法は神に喜ばれる歩みが出来る様に規則が書かれているものです。そしてその律法を守る、すなわち神に従うことで祝福を得ることが出来るわけです。

イエス様は 40 日 40 夜の断食の後で文字通り空腹状態になっていました。しかし、必要な肉の糧は神の配慮によって与えられるという父なる神への信頼がありました。イエス様は石をパンに変えることは容易に出来たことですが、父なる神の御心でなければ動くことはしませんでした。(ヨハネ 5:30)

私達も神の口から出ることばによって生かされています。神の配慮を信頼し、神に従う生活を続けてゆきたいものです。

10月28日

## 「新しい人」

コロサイ 3:5-11

武安 宏樹 牧師

十戒の第10「貪るなかれ」の特徴は、殺人&姦淫&盗み&偽証とは異なり、客観的行為として処罰対象になりませんが、全ての罪の水源となっています。この第10戒違反＝第1戒違反であり、貪欲＝偶像礼拝だとパウロは断じます。私たちは熱心に神に祈り求めますが、内実は願望ありきではないでしょうか。さらに不都合な状況に陥れば悪魔よ出て行けと叫ぶ。御手よりも自分の腹を、神とする罪深い信仰生活を送ってはいないでしょうか。そういった諸欲を、「殺してしまいなさい」これは3節との関係上、「死なせておきなさい」の方が、鮮魚を突き刺すのではなく、死んだ過去の亡霊に息をさせない意で順当です。欲望の支配は不満の感情を生み、導火線となって他人や自分を中傷します。「互いに偽りを言うてはいけません」とその惨めで暗い生き様を総括したのは新生したキリスト者が古い生き方に惹かれ、むさぼりや偶像礼拝を行うのが、神にも自分にも偽ることで、与えられた幸いな人生を捨ててしまうからです。

「しかし今は～」以前と根本的に違う新しい人生&人格が提示されています。「捨て」「脱ぎ捨て」「着る」は一回限りの完結を表す、過去時制が用いられます。自分や周囲の評価はさておき、神の目には確かにあの時に変えられたのです。感覚に頼らずに、信仰によって御言葉を素直に受け取ると聖霊が働かれます。第一の恵みは罪からのきよめです。自分の努力でなく主が悲しまれることで、抑制力となります。第二の恵みは赦しによる愛と希望です。神の愛は完全で、「新しい人は、ますます新しくされ」救われるだけでなく現在進行形の成長が、異なる二種の「新しい」により、質的&時間的にも更新されると力説されます。御言葉による真の霊的知識の更新は、異端が死んだ知識で高ぶるのと反対に、キリストの人格に近づけられて満たしとへりくだりを生みます。心の柔和は、自ずと口をきよめて言葉が変わります。箴言で主の知恵&知識をもつ者が、言葉で人をいやして力づけることを語るのは、実際はキリスト者の特権です。罪人は己の正当性に固執しつつ、旧態依然とした生き方で滅びに至りますが、私たちは新しい霊の力から、誰にでも公平に温かい言葉でいのちを与えます。信者に内住、未信者に外から、世界に摂理。私たちは御霊の統御を知ります。

11月4日

「愛されている者として」

コロサイ 3:12-13

武安 宏樹 牧師

① 神に選ばれている確信（12節前半）

「新しい人」(10 節)の中身について「選ばれた者、聖なる、愛されている者」とパウロは定義します。「世界の基の置かれる前から」(エペ 1:4)選ばれていると、私たちが自分がどのように救われ成長しているか以前に、「救い＝神の業」と、救いにおける神の主権性と、その目的は神の栄光のためとの確信が重要です。逆に言えば救いや聖化の獲得の「ために」、努力することは罪とさえ言えます。私たちは奉仕に勤しむ中で、乏しさと罪深さに打ちのめされるものですが、目を天に上げて選びと愛を黙想すると、理屈で説明不能な感謝に出会います。

② 聖霊に取り扱われた人格（12節後半）

5つの徳性は、主の愛の「広さ・長さ・高さ・深さ」(エペ 3:18)を理解するのと、御霊の実(ガラ 5:22-23)で結果的に身につくもので、積み重ねではありません。神に選ばれ、主イエスに贖われ、聖霊に燃やされることを、知的&心情的に認めて心を明け渡していくことが、主との交わりにおける訓練の実なのです。知的だけで心が開かれないと、相手も心を開かないので関係が深まりません。己の力で心を広げようとしても、聖霊の働き無しにはひねくれて逆効果です。感情だけ取り出していやしを求めても、十字架の贖罪とセットで受けないと、自己肯定で気持ち良くなるだけで終わるので、結局は心の根が変わりません。ダビデの賛歌に解答があります(詩 139:)。造り主との関係と感謝が基本です。

③ 主イエスが赦されたように（13節）

前節の御霊の実は自己満足ではなく、誰かに供給するためにあるものです。「だれかがほかの人に～」とは、彼らの感情的なやりとりに流されることなく、対岸の火事として放置でもなく、第三者としての同情と謙遜を表すことです。激しい悪口にじっと耳を傾け、自分の弱さに主が働かれた恵みを分かち合い、客観的見解を述べて、カウンセラーとして共に主イエスを見上げることです。すると当事者をいやし慰めるだけでなく、教会全体の雰囲気良くなります。「父よ。彼らをお赦してください」の叫びの背後には、無関係の不満が結集して、主を責め立てていました。もし一線を引けば、彼らは苦しみ続けるでしょう。祈れば霊的状况は打開されます。キリスト者は隣人に交わりを拡げる者です。

11月11日

## 「至上の愛」

コロサイ 3:14

武安 宏樹 牧師

「愛」(原語アガペ)は神の愛を表し、全ての徳目を団子の如く串刺しにして、不可欠な帯(=絆)となります。この愛について I コリント 13 章は教会の一致、I ヨハネ 4 章は偽者と区別、本書は「新しい人」(10 節)の特徴とされています。この語は垂直的な神の愛だけでなく、聖徒相互間の交わりにも用いられます。双方は十戒の前&後半の関係同様、神の愛を知ること無ければ隣人を愛せず、貪欲な罪人は神の愛を受けることにより、初めて隣人愛を全うできるのです。「深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容」(12 節)は私たちが 7 割(?)努力する一方、それが出来ない駄目な自分に出会い、残りは神の愛により全うされるのです。カルヴァン曰く「これらすべての『上に』」でなく、『前に』が妥当とします。人様に施しなど行う前に、頭を垂れて主イエスの愛を求めよということです。

この愛の本質についてパウロは「愛は寛容であり、愛は親切〜」(I コリ 13:)と雄弁に語りますが、これを「私の愛」と置き換えると達成不可能が明らかです。この愛は父なる神と御子イエスと聖霊のみ有す、一線引かれた特別な愛です。その証拠に「主イエス」と置き換えると、十二弟子という奇人変人集団に対し、かくも忍耐&寛容&謙遜&期待を発揮されたことに、改めて驚かされます。「愛は決して絶えることはありません」私たちに対しても全く変わりません。隣人に何か行う以前に、神が私たちに慈愛&謙遜&柔和&寛容を注がれます。その愛を受けて聖霊が泉の如く、神の愛を体全体に供給する動力となります。聖霊はいやし&解放&霊的バランスを与えます。隣人愛はそれからなのです。何か行う以前に、神の愛が私にされたことをそのまま隣人へ模倣するのです。

ペテロは傷心状態で復活の主に「わたしを神の愛で愛するか？」と問われ、畏れ多さから「あなたを兄弟愛で愛します。」返答が彼の精一杯の誠実でした。されど 3 度目に主は「わたしを兄弟愛で愛するか？」と、歩み寄ってくださり、兄弟愛をも包含する神の愛を証しました。後に信仰の梯子(II ペテ 1:5-7)で、彼は 7 段目の兄弟愛まで上り詰めても、最上段の神の愛はベテルの夢の如く、天から地上へ降りてくるものであり、聖霊降臨で初めて全き愛を悟りました。ヨハネは神の愛⇒隣人愛の流れがさらに明確です。愛で古い肉は殺されます。信仰も希望も神への一方通行ですが、愛は受けて与えて還元する循環です。

11月18日

「感謝にあふれて」

コロサイ 3:15-17

武安 宏樹 牧師

① キリストの平和が心にある（15節）

12～14 節のキリストにある徳と愛の交わりから、平和(平安)が語られます。神との関係で心の平安と対神&対人関係の平和は、不可分の関係にあります。「支配する」は内憂外患に揺さぶられない絶対的平和でなく、審判員の意から、古い肉と新しい霊、愛と憎しみなど争いの中で、結局は主が統治する平和を、意味しています。それがわかると、平和に関する理解が変わってくるはずで、疲弊しているのに平安と強弁したり、戦いがあるのに平和だと宣言するのは、自分に嘘をついているとわかります。表と裏の使い分けで平安が失われます。それでは感謝が沸いてきません。内憂外患の存在を正直に受け入れることで、悔い改めと関係の回復に導かれます。キリスト者は自然体で生きることです。

② キリストのことばが宿る（16節）

御言葉の内住は、並行箇所御霊の満たしと同義と分かります(エペ 5:18)。「聖霊」「御言葉」だけだと神秘的啓示に傾きがちですが、「聖書」「御言葉」と厳密な釈義と教理理解で固くなるので、聖書&御言葉&聖霊の三つが必要です。主動詞「住む」に分詞「教え」「戒め」「歌い」がかかり、聖霊の満たしを前提に、教育や賛美の働きが展開されると分かります。「あなたがたのうちに」とは、個人的にも共同体的にも、主が真ん中に臨在する意味です(文語訳「衷に」)。要するに教育も賛美も交わりも、動機と目的が御言葉の満たしにつながれば、個人的にも共同体的にも成長につながれば、基本的に何をやってもよい訳で、私たちは常に霊性と活動の関係を意識して、楽しい教会形成に感謝できます。

③ 主イエスの名によってなす（17節）

以上を総括して、言葉も行いも主イエスの名によってすべしと命じます。どこを切っても金太郎飴のように似姿が見える。言葉だけでは駄目ですが、一見格好良く思える不言実行も誤解を生みます。丁寧に説明を尽くすことで、関係は深まります。分詞「感謝」は主動詞「なす」にかかり、言行一致の生活は、仲介者イエスの御名によって、天の父の豊饒さへの感謝に私たちを導きます。「感謝」は「恵み」に通じます。感謝は御霊の実と同時に、私たちも恵みの道筋を主体的に想起して感謝しましょう。感謝は健全な信仰生活の当然の帰結です。

11 月 25 日

## 「心から仕える」

コロサイ 3:18-4:1

武安 宏樹 牧師

### ① 造り主を恐れること

並行箇所エペソ 5～6 章に詳述されますが、夫婦&親子&主従の三関係から、相手をどう思うか以前に、聖書からたとえば夫婦各人の造られ方と関わり方を、学ぶ必要があります。互いの違いを知り、違うからどう関わるか考え始めます。聖書を読めば自動的に分かる訳でなく、相手を謙虚に知らなければなりません。短所でなく長所を探さないと、私たちが高価で尊いとした神の心が分からず、たとえ短所や障害でも主が如何に栄光を現すか、期待しなければなりません。さらに神は時間の主ですから、先天的性質だけでなく後天的経験も影響を与え、とくに思春期的人格形成に親がどう関わるかで、成長したり葛藤したりします。一人でなく二人で本質的な話をしながら見上げると、造り主の恵みが見えます。親が子の全てを知るかのように支配するのは間違いで、主だけが全知の方です。反対にどうせ相手のことなど理解できる訳ないと、放任するのも間違いです。夫婦&親子に比べて主従関係は赤の他人だから、以上両極端が多いようですが、主の摂理で共に働ける恵みを覚え、相手を知り従順を学ぶと互いに成長します。

### ② 心から仕えること

エペソ書は夫婦関係を詳述しますが、本書では主従関係を詳述しています。当時は妻&子&奴隷の地位が低かったのですが、夫&親&主人に対しても、パウロは果たすべき義務を公平に語ります。これは地上の社会変革ではなく、主イエスが六者各立場を知るため、主ならどう仕えるかが念頭にありました。人間関係に聖霊の働きが介在します。奴隷ハガルに優しい声をかけ(創 21:)、追われる子どもを擁護し(ル 18:)、不妊&処女の胎を開いて世の知者を辱め、これは地上的な三次元ではなく、霊の交わりを加えた四次元の世界なのです。マリヤは神が賤女を上げ不遜な者を下げ、偽りの世界の終焉を賛美しました。四次元の世界を知るからこそ、三次元の世界を軽く見ずにかえって仕えます。喜んで主に仕えながら嫌々人に仕える、表裏を使い分ける絶望の奴隷でなく、相手の存在や関係性に主の摂理と臨在を求めれば、それは希望に変わります。聖霊は私たちを弱さから解放しますが、また義の奴隷に進ませます(マ 6:18)。主人は奴隷以上に仕える奴隷です。キリストに倣い仕えましょう(ピリ 2:6-7)。



12月2日

## 「祈って下さい①」

コロサイ 4:2

武安 宏樹 牧師

### ①「目をさまして」

主イエスは再臨(マコ 13:33-37)、使徒たちは終末的戦いの(エペ 6:18/ I ペテ 5:8)、心備えとして目をさまして祈れと語ります。逆に目をさましていない状態とは、ゲツセマネで居眠りの弟子たちを思います(マタ 26:)。覚めると眼前に敵の軍勢が。悪魔以前に睡魔の戦いに勝てなかった彼らは、それが主を見続ける限界でした。その困難は主もご存知だったでしょうが、それでも見ていてほしかったのです。かりに眠らずに主の祈る姿を凝視していたら、後の展開は変わったでしょう。時に主を忘れて眠るのは私たちも同じですが、感謝なのは聖霊の助けによって、叱咤激励されて、忘れても点が線と結ばれて軌道的に祈りが導かれることです。

### ②「感謝をもって」

並行箇所のエペソ 6 章に「目をさまし」「絶えず」があり、「感謝」がないのは、戦いに向かう教会の姿をパウロは見たのでしょう。本書は主が最後の晩餐で、感謝を捧げてから十字架に向かう、個人的献身の姿を思うことができます。だから「感謝」は私たちの罪のために死なれた、主の贖いの業から始まります。罪の赦しの確信なくば日々の感謝は語れず、的外れで偽りの感謝となります。パリサイ人は自分の行いが正しく、取税人を差別できることに感謝しました。対する取税人は「神よ。罪人なる我を憐れたまえ。」だけでした(ルカ 18:10-14)。あわれ取税人は感謝の 100%を主に向け、パリサイ人は 70%を自分に向けました。私たちはどうでしょう。主に感謝を尽せば恵みの祈りの世界に沈潜できます。

### ③「たゆみなく」

直訳だと「祈りに没頭しなさい」となり、聖霊降臨前の一心祈祷(使 1:14)や、執事選出に伴う使徒職の務め(使 6:4)など、初代教会に同じ語が頻出します。私たちはどれくらい祈っているでしょうか。絶対量以前に態度が問われます。自分の願いありきで祈ると、御心を探り求める聖霊の働きが阻害されますし、闇雲な徹夜&断食祈祷から、時に聖書から逸脱した危険な境地に達するので、霊的制御のために複数祈祷も有効です。かくて修正&悔改め&解放を得ます。ヤコブの闘は、自我が砕かれ、臆病が追放、勝利の確信を得ました(創 32:)。目をさまして惑わしを退け、感謝しつつ視野を拡張、祈りに専心しましょう。



12月9日

## 「その名はインマヌエル」

イザヤ 7:1-14

入川 達夫 師

神の御子の降誕を待ち望むアドベントのこの時、処女降誕について告げられた「インマヌエル預言」に心を留めよう。

### I. 南ユダ王国アハズ王の時代(BC730年頃)ー「インマヌエル預言」の背景

- a) 強大な力を増していたアッシリア帝国と戦うため、アラムと北イスラエルが南ユダに反アッシリア同盟を結ぼうと誘いかけてきた。
- b) アハズ王はこれを拒否した。怒ったアラムと北イスラエル連合軍が南ユダを攻めてきた。南ユダはこの危機的状況の中でパニックに陥った。

### II. 危機的状況のただ中でアハズ王がとった対応策

- a) アハズ王は水源地に向かった。籠城策のためである。
- b) 彼が駆けつける先は水源地ではなく、主の宮ではないか。
- c) 主なる神を信じない偶像礼拝者アハブの根にある罪

### III. 危機的状況のただ中で神が与えられた「インマヌエル預言」の意味 a) 「恐れるな」ー信仰を励まされる主

#### b) 恐れる必要のない根拠と保証

\*アラムの王も北イスラエルの王も鼻で息する人間に過ぎない

\*ユダの王(かしら)は誰か。ユダの王は生ける神ご自身である。

- c) 主なる神がそのただ中におられる約束とするしー「インマヌエル預言」  
→この約束とするしが神の御子イエス・キリストの降誕によって成就した。

### IV. 危機的状況のただ中でインマヌエルの主なる神を信じる信仰に生きる

- a) 危機の時、私たちが駆けつけるべき所は主なる神のみもとである。
- b) 主はどのような時にもいつもともにいてくださるお方である。
- c) インマヌエルの主が私たちを導いていてくださることを信じて進もう。

12月16日

## 「祈って下さい②」

コロサイ 4:3-4

武安 宏樹 牧師

私たちは日頃から牧師へ&兄弟間で&祈祷会にて、祈りの応援を願います。この書簡も一同の前で読まれることで、祈祷課題がシェアされたのでしょう。パウロは宣教の働きについて、自分が祈っていれば大丈夫とは考えなかった。独自で祈ることの閉塞感から助けを求めるのも、無い訳ではないでしょうが、確信として、祈り&祈られる関係あって初めて大宣教命令は成就するのだと、本人&支援者&宣教地の三角関係こそ、聖霊が働かれる土壌だと考えました。

旧約時代の祈りを振り返れば、創造主とアダムの一対一の交わりに始まり、アブラハム&モーセ&サムエル&イザヤ&エレミヤなど、驚くほど個人的で深い祈りがあります。個人的にだけでなく契約の民の共同体の祈りとしても、モーセ&サムエル&ソロモンが代表として、幕屋や神殿は会見の場所でした。つまり旧約時代も、神と民の祈りのコミュニケーションは為されていました。垂直的だけでなく、水平的なダビデ&ヨナタン、ヨセフ&マリヤも然りです。けれども新約時代はキリストの贖罪の完成で、職務的に預言者&祭司&王が、代行していた業を、今や私たちは御名によって大胆に主と直接祈り&交わり、垂直&水平が統合されてみなが預言者&祭司&王となり、平等化されました。

一言で言えば祈りの形が変わった。祈りの結びにキリストの御名によりと、必ず唱えるのは、主が死なれた瞬間に隔絶が撤去されたからです(ルカ 23:45)。この恵みを個人的かつ共同体的に、どれくらいの信徒が覚えているでしょう。初代教会は祈りながら、御言葉を教え合い、パンを割き合い、施し合う中で、そのような霊的な交わりに魅力を感じて、救われる魂が起こされていました。新約の祈りの特徴として、①宣教の目的、②チームでの祈りが挙げられます。祈る人と祈られる人の二極化でなく、祈り&祈られることで責任を果します。万人祭司として祈り、万人宣教師として福音を伝えるのが、キリスト者です。以上の確信をサタンは、惑わしと恐れと失望と怠惰の霊で潰そうと躍起です。宣教は聖霊と悪霊の陣取り合戦だから、祈りの軍勢は多ければ多いほど良い。世の人が多く教会を訪れるこの季節、祈りの勇士として立ち上がりませんか。

12月23日

## 「味のあるキリスト者」

コロサイ 4:5-6

武安 宏樹 牧師

味のある人とはどういう人でしょう。神は人を他のどの人とも違う存在に造られたので個性は当たり前ですが、日本では個性的な人は敬遠されがちです。さらにキリスト者は聖霊の賜物ゆえ、未信者に比べて個性が助長されますが、「塩け」は「和合」をもたらすので(マコ 9:50)、社会の中で魅力的な人になります。ただし周囲を引き立たせる塩となるために、火を以て砕かれるのが条件です。人格が練られ似姿に再創造される過程で、良い「塩梅」に個性が実を結びます。

そこで塩味の利いた言動をなすため、具体的にどうすればよいでしょうか。前節までの文脈から「宣教」と「祈り」という、二つのキーワードが浮かびます。キリスト者のふるまいは立派な証しで、それを見て世間は判断&評価します。前章に登場する同じ屋根の下の夫婦&親子の視点は、断然シビアになります。人の気持ちを汲まずに上から目線で何かと説教したがると、そんな宗教など、誰が信じるかと思います。そこで必要なのが祈りで、まず砕かれるため祈り、「機会」を捕らえるため祈り、聖書に聴従し知恵ある言動のため祈り求めます。

思いやりにあふれ、優しく、知性的で、されど罪には決然とした言動は、人の心に残ります。反応は素直な人は良いですが、ひねくれた人が問題です。心に傷を抱えた人に傷口に塩を塗る言葉をかければ、大変なことになります。だから余計なことを言わなければ無傷で済みますが、逆に返り血を浴びても、言わない相手が泥沼から抜け出せないかも知れず、判別に困難を極めます。そこで自分の動機を祈りで探らされ、兄姉に祈ってもらうのも良いことです。そうやって人に聞くのもいいですが、祈りの助けになるのが詩篇&箴言です。

ダビデの祈りに罪が示され(詩 139:)、ソロモンの知恵は謙遜です(箴 28:)。そのように静まり祈る中で確信を与えられたら、語る前から勝利も同然です。何でも語るのではなく御手の中で、タイミングや方法を熟考します(箴 24:5)。示された言葉を取り次ぐのは恵みで、返り血を浴びても心に残るものです。「十分に生かし」は「買い戻す」意で、チャンス積極的に祈り求めることです。主の宣教は汗と涙も塩味がし、祈り&感情&行動を伴う滋味深いものでした。

12月30日

### 「動労者たちを覚えて」

コロサイ 4:7-18

武安 宏樹 牧師

本書の結部で多くの名前が登場します。映画や書物などの事務的&礼儀の次元でなく、個人名を記して彼らの価値を高める願いがパウロにありました。同労者＝「お友達」ではなく、神学的&宣教的に筋が通らないと思う者と戦い、出会いもあれば別離もありました。彼は教会をキリストの体にたとえますが、性質は違えど、宣教プロジェクトチームも同様と考えました(Ⅰコリ 12:22-23)。重要な働きに拘らず、地味だったり前科があったり過小評価されている人に、光を当てたい。この名簿は単なるあとがきでなく彼の熱い思いが存在します。

テキコは「運び屋」として、エルサレムの聖徒へ贈り物やエペソへの手紙を、危険を冒すだけでなく口頭で補足説明する、忠実さと伝達能力を有しました。記者の分身として字面に留まらず霊性を伝えて、「励まし」を送る重責でした。同行するオネシモは逃亡奴隷として評判は芳しくなかったのが、悔い改めて、後に有益な働き人となり(Ⅱテ 11)、その姿を見せるのは主を崇めるためです。

アリスタルコは騒乱逮捕(使 19:29)、献金上京(20:4)や最期の旅(27:2)に、同行して不利益を厭わず寄り添いました。それは友情愛を超えたものであり、自分の働きばかり気にする者と違い、心中こそ光栄と己を犠牲にする人です。マルコは途中離脱の不名誉がありましたが(13:13)、回復された信頼関係に、パウロの優しさと過去の先入観でなく、神の愛に基づく肯定的視点を見ます。

エパfrasはコロサイはじめ三教会で牧会者として仕える、功労者ですが、彼の見えない祈りと配慮を強調します。教会は使徒⇒牧者へ委ねられますが、御言葉に立って健全に成長するか否かは、牧者の質によると知っていました。地道な側面は評価されませんが、疎かになると霊的な危険信号が点灯します。そんな彼の努力を信徒も知ってほしいと、建て上げてほしいと願っています。

アルキポには特殊な新しい任務かも知れません。パウロの期待を感じます。獄中で口述筆記とはいえ最後に自筆します。もはや福音は鎖から解放されて、今や同労者の数だけ燎原の如く拡がり(Ⅰ:6)、彼は恵みの影響力に驚きます。私たちも名を連ねませんか。同労者の数だけ天の恵みは地に直結するのです。